

川上弘美『月火水木金土日』

——6時間目の試み——

松井和泉

三省堂高校教科書『新文学国語』に所載の川上弘美『月火水木金土日』を、今年度春、最初の教材として高校三年生三クラスに教えることになった。ホームクラス二クラスを学力別に三分割した二十名程のクラスを三クラス分、週二日で担当する。分割するために必要になった三人目の教員が、年度当初になって講師の募集となったわけである。

昨年度は旧課程最後の現代文Bを第一学習社の教科書『標準現代文B』で別の高校で担当していた。昨春、教材が送られてきて巻末をみて驚愕した。著作権者に東郷克己先生の名前があったからである。成城大学のご縁を感じた。「卒業生として恥じない授業を行いたい」と、成城国文学会更新の際通信欄に記載して抱負として臨んだ次第である。

あれから一年。今度は三省堂である。こちらは、「国語科

教育法」でお世話になった工藤信彦先生が長らくその校訂を担当された出版社である。私は学部時代から主に古典専攻であり、教育実習も古典で『徒然草』を希望して行った身である。科目が選べるなら「古典探求」か、「言語文化」で仕事を受けたいと内心思っていた。だが、『新文学国語』を大久保の教科書センターで目にして考えが変わった。現代語訳ながら古典作品を豊富に取り上げている教科書であったからである。先に都内の高校で新課程について最も採用が多かった教科書を各科目既に購入してあった。高校の卒業式が終わる頃になっても新年度の勤務が決まっていな焦りもあった。どこから声がかかってもすぐに授業ができるように、一通り目を通しておこうと思っていた。もはや科目を選ぶ身ではない。諦めかけているところに希望の「言語文化」で二コマが

決まった。大修館の教科書で、念願の古典を高校生に教えられる！こちらの学校は板書もベースは学年共通でスライド使用のため、板書にアテレコする感じになる。一回性の授業でみせるしかない。

結局あらかじめ用意しておいた一番多く採用されている教科書は掠りもしなかった。中学とは異なつて、近隣校に関わらず、各校の国語科教員が生徒の実情に合わせて教材を選択しているのである。そして新年度に入ってからご縁を頂いたのが三省堂『新文学国語』であつた。

翌週からすぐに授業である。ウェブで見られるという資料が頂けた分、恵まれた。それでも教材研究のため、任命日までは学校外の資料を使用するしかない。昨年同様、上野の国立国会図書館国際子ども図書館に向かった。新課程は閲覧のみなので、旧課程でコピーを頼み、指導案の糧とした。そのため、最初の教材である川上弘美『月火水木金土日』は旧課程の三省堂『精選現代文B』（二〇一八年度版）指導書を元に教案を作成することになった。勤務が始まってから準備室に並んだ指導書と突合して、補足したが大同小異であつた。指導案と実際の現場で大きく異なつたのは、時間数である。カリキュラムは精読派の先生主導で組まれていて、五月の中

間考査までこの作品一本で行つてほしいというのである。指導書だと新旧とも二時限の割り振りのものを、一コマ四五分とはいえ六時間に広げる必要があつた。どう盛り込むか、教師の腕の見せ所である。学部ゼミ同様、近現代専攻の先生がやはり現場にも多いのである。詩、短歌、俳句は古典からの流れもあるので広げやすいというものだが、シラバスは決まっている。順当にいけば期末考査は角田光代の『北山の垣間見』である。だからこそ最初の一作品のつかみは大切である。だが、戦後も平成以降、〇〇年代の文学はもはや新作と変わりない。初見で解答する国語の試験問題に向き合うように、テキストに向かった。

ホワイトボードに手書きの板書の先生もいるが、三クラス再現性と言うことも考えて、昨年同様学校のパソコンを借りてパワーポイントでの授業とした。補足は半分空いたホワイトボードに書けばよい。

結論から言うと、一学期の感想に書かれた通り、ボリュームが多すぎた。生徒のレベル感より盛り込み過ぎた。二学期からはプリントもスライド枚数も最低限に変更した。

力み過ぎの内容から、指導書にはない工夫をした点をいくつか紹介したい。

「あけびの蔓の籠」は調べさせる内容になっている。現在の高校生は一人一台端末を購入または貸与されているが、重くてまず持ってきていない。紙の辞書はなおさらである。英和辞典ならともかく国語辞書はまず持っていない。また高価な電子辞書は全員持っているものではない。この状況で意味調べの時間を与えて、生徒が机上に出してくるものは、「スマホ」である。正式名称がスマートフォンだから略するなら「スマホ」と表記すべきかどうかと考えるが、一般に「スマホ」なのでここでも「スマホ」と一応表記しておく。紙の国語辞書なら比較的安心の解答にヒットするものだが、スマホで調べると世界のウェブに繋がってしまう。そこで予期せぬ解答に遭遇してしまう。「あけび」について調べてみるとまさにそうで、教育的配慮の必要性を感じた。そのため「あけび」はランダムに調べるのではなく、青森県庁のホームページから「青森県の伝統高原文物あけび蔓細工」が出て来るURLを板書して、「画面が出ましたか？」とスライド上の画面が出たかを確認させるようにした。

他のクラスを担当される先生も最初はあけびについて調べさせるところから入ると聞いた。どうされたかは聞いていない。(幸い、二学期に扱っている『山椒魚』ではそのまま調

べる指示をして問題なかった。)

二点目は、川上弘美の小説に散見される漢籍からの影響である。「月火水木金土日」の所収された新潮文庫『ざらざら』など他作品にも見られるものである。教科書本文から籠おぼさんの台詞「禍福はあざなえる縄のごとし」を取り上げた。ほぼ同じ意味の故事成語を問い、「人間万事、塞翁が馬」を答えさせる発問である。時間数に余裕があるため、ここから国語便覧を用いて、劉安『淮南子』人間訓を読む授業をした。

四字熟語「油断大敵」の方は、諸説あり、比叡山の話も口頭ではしたが、「塞翁が馬」の方がおそらく試験に関わる問いになるので、混乱を避けるため深入りしなかった。それでも中間考査では「馬」の正答率はそれほどでもなかった。

三点目が、曜日の推移について考察するものである。教科書としては、探求教材の書評や本人の随想を併せ読む回である。その前に、本文読解の発展的考察として、私の読みを紹介することにした。小説の読解は教科書の求める主題を捉えることに終始せず、読者の数だけ読みがあつて良いという本来文学の楽しみ方の一端は伝えたいと考えている。考査の問題も採点の都合上、択一式が中心であるから、道徳的に正し

いものではないと解答にならないという縛りが国語科にはつきものである。そのうえで、試験には問わないけれど、作品の深奥に迫る読み方があるということとを来年には上級学校や社会に出て行く生徒たちには伝えておきたいと思う。

この作品のタイトルは『月火水木金土日』と、月曜始まりのカレンダーである。ただし、小説に描かれるのは日記のように月曜日から始まり順になっているわけではない。それはなぜだろうか。出て来る曜日の順番は九段落を追って次のとおりである。^①

第一段落 「土曜日」「迷ったち」の「わたし」

第二段落 「水曜日」「玄関で」「声」を聞いて驚く「わたし」

第三段落 「金曜日」籠から発せられる「声」と「わたし」

第四段落 （曜日記載なし）「声」を「籠おばさん」と名付ける「わたし」

第五段落 （曜日記載なし）「籠おばさん」と気心通う「わたし」

第六段落 「木曜日」「籠おばさん」に従わない「わたし」

第七段落 「火曜日」無言の買い物籠をしまう「わたし」

第八段落 「月曜日」「声」と再会した「わたし」

第九段落 「日曜日」一人暮らしを楽しむ今の「わたし」

第四段落、第五段落は「籠おばさん」と「わたし」の関係が、それまで一方的だったものから「双方向的」なものに移行し、「私」が積極的に言葉を発するようになる変化をもたらし場面が描かれている。そこは特定の日に起きた事件ではなく、日常を一般に描いている。そのため、曜日を割り振っていないと考えられる。

事件、特別な出来事が起こるところが曜日付きになっている。バラバラな七曜の登場に疑問が生じる。何か意味があるのではないか。

中学国語の教科書で光村図書ひくむらの現行『国語1』三〇〇頁に「語彙を豊かに——心情、様子、行為を表す言葉」という資料が載せられている。この中の「心情」の欄は五項目が挙げられている。^②

□うれしい 喜ぶ・喜ばしい・愉快・歓喜・有頂天・声を弾ませる・うきうき

□悲しい 悲しむ・もの悲しい・悲痛・悲壮・胸がつかえる・胸がふさがる・しんみり

□^{おそ}恐ろしい 恐れる・怖^{こわ}い・恐^{きょうふ}怖^ふ・畏^い怖^ふ・戦々恐々・身の毛もよだつ・びくびく

□^{おど}怒る 怒^{いか}る・いきどおる・激怒^{げきど}・憤怒^{ふんぬ}・頭にくる・腹を立てる・ぶんぶん

□^{しん}信じる 信用^{しんよう}・信賴^{しんらい}・信仰^{しんこう}・確信^{かくしん}・思い込む・頼^{たの}りにする・真^まに受ける

この五項目を見たとき、最初の四つは心情を表す表現として素直に受け入れられるだろう。だが、五つ目の「信じる」はなぜここで出て来るのかと中学一年生の生徒なら疑問に思うものではないだろうか。教員はこの五つを見て気付くことがあるだろう。高校か学部の学習課程で陰陽五行説を知ることになるからである。そのうち五行説にあたるものがそれであり、五行説に基づくと、万物は木火土金水の五行に帰属するものが決まっている。

「宇宙の万物は効用と類別に基づいて五行の生剋の原理に帰納し、人体のメカニズムを深く掘り下げて表す」ものとされ、そのうちの人像の一つ、七情によると次のような分類となっている⁽³⁾。

肝象木 怒・驚

心象火 喜

脾象土 思

肺象金 悲・憂

腎象水 恐

この七情を心情表現の五つとして挙げたものが、先の五項目であると思われる。光村図書『国語1』教科書の挙例の順は五行でいうと、火、金、水、木、土ということになる。

それでは、五行説にあてはめて、『月火水木金土日』の曜日配列を考察してみるとどうなるだろうか。

金・木の七情には、文脈からよりふさわしい方に丸囲いをした。

第一段落 「土曜日」「迷うたち」の「わたし」思

第二段落 「水曜日」玄関で「声」を聞いて驚く「わたし」

恐

第三段落 「金曜日」籠から発せられる「声」と「わたし」

悲^(憂)

第四段落 (曜日記載なし)「声」を「籠おばさん」と名付ける「わたし」

第五段落 (曜日記載なし) 「籠おばさん」と気心通う「わたし」

第六段落 「木曜日」「籠おばさん」に従わない「わたし」

⑧驚

第七段落 「火曜日」無言の買物籠をしまう「わたし」喜

七曜逆順

第八段落 「月曜日」「声」と再会した「わたし」 七曜逆順

第九段落 「日曜日」一人暮らしを楽しむ今の「わたし」

七曜逆順

(カウントダウン的)

また、五行説には生剋制化の要素もある。これも曜日順に適用してみる。

第一段落から第二段落は土剋水で相剋の関係である。

第二段落から第三段落は金生水の逆で反生の関係となる。

第三段落から第六段落は金剋木で相剋の関係である。

第六段落から第七段落は木生火で相生の関係である。

第七段落から第八、第九段落は、五行を離れ、七曜で火曜、

月曜、日曜と逆順を進行する。まるで三、二、一…と週末の終末に向けて、物語のカウントダウンするようではないか。

相生、反生が順接、相剋が逆接といった論説文のような明

白な接続詞があるわけではなく、それほど単純なものではない。それだけに物語の展開を構成するものとして面白い捉え方が出来るのではないか。

小説読解の最後の発問に「このあと、曜日はどう推移するだろうか」というものがある。これは用意された発問であり、恐らく、「わたし」はもう一人でも大丈夫であって、曜日もごくしくしくすることなく、この日曜日を起点として、『月火水木金土日』というタイトル通りに定常化するだろうと読ませる内容である。

以上が指導書の三倍の時間をかけて授業を試みた経緯である。高校国語科新課程「文学国語」を初めて担当した際の覚書としてエッセイ調に綴ってみた。指導の一例として、参考になれば幸いである。また数々のご教示を賜りたく提示するものである。

注

(1) 『新文学国語 指導書』(三省堂、二〇二三年) 一一—一

三頁

(2) 『国語1』(光村図書、二〇二二年) 三〇〇頁

(3) 鈴木博訳 周春才作画『まんが易経入門』(医道の日本社、一九九九年) 二二二頁

参考文献

『新文学国語』（三省堂、二〇二二年）

『新文学国語 指導書』（三省堂、二〇二二年）

『精選現代文B』（三省堂、二〇一八年）

『精選現代文B 指導書』（三省堂、二〇一八年）

『国語1』（光村図書、二〇二二年）

川上弘美『ざらざら』（新潮文庫、二〇一一年）

川上弘美『大きな鳥にさらわれないよう』（講談社文庫、

二〇一九年）

『クウネルvol.18』（マガジンハウス、二〇〇六年三月）

福田詩子『八字の四宜』（香川印刷株式会社、二〇二二年）

安岡正篤『易学入門』（明徳出版社、一九六〇年）

今井宇三郎、堀池信夫、間嶋潤一、新釈漢文大系六十一

六十三『易経』上、中、下（明治書院、二〇〇八年）

中村璋八 新編漢文選思想・歴史シリーズ七、八『五行大

義』上・下（明治書院、一九九八年）

貝原益軒著・伊藤友信訳『養生訓 全現代語訳』（講談社

現代文庫、一九八二年）

家本誠一『東洋医学の原典 黄帝内経素問訳注 第一（第

三巻）（医道の日本社、二〇〇九年）

（まつい・いずみ 都立学校講師・放送大学大学院修士全科生）